

# いちごの作型別生育パターン

## 1. 試験のねらい

最近のいちご栽培は、早出し技術が確立し、単収も大幅に増加しているが、年によっては収穫の遅延や品質の低下がみられ、生産は必ずしも安定しているとはいえない。そこで、生産安定のためには、生育診断技術を確立し、生育状況に応じた適正な栽培管理が必要となるが、その基礎資料を得るため作型別の生育パターンを調査した。

## 2. 試験方法

品種は女峰を用い、作型は早出し夜冷、普通夜冷及びポット育苗の3作型を供試した。育苗は12cmポリポットを用い、早出し夜冷を6月27日、ポット育苗を7月6日、普通夜冷を7月15日に採苗した。夜冷処理は早出し夜冷を8月5～30日、普通夜冷を8月25日～9月9日に行い、定植は早出し夜冷を8月31日、普通夜冷及びポット育苗を9月10日に畝幅110cm、株間21cmの2条高畝へ行った。施肥量はa当たりN:2.0、 $P_2O_5$ :3.0、 $K_2O$ :2.0Kgを施用し、保温開始は10月23日に行った。調査は、地温経過(深さ20cm)、出蕾、開花及び収穫始期、葉重、果実重、根重(株を中心に縦横深さとも20cm)、健全根数及び収量について行った。

## 3. 試験結果及び考察

- (1) 地温は12月中旬～1月下旬が低く、最低地温は15℃を下回った。
- (2) 各花房の出蕾、開花及び収穫始期は1次腋花房までは早出し夜冷、普通夜冷、ポット育苗の順に早かったが、2次腋花房の収穫始期は作型間に大差を認めなかった。
- (3) 頂花房の着果数はポット育苗が29.6花とやや多かったが、1次腋花房では早出し夜冷が32.9花と多く、ポット育苗はやや少なかった。
- (4) 出葉速度は、定植活着後の9月中～下旬が10日間に1.7～2.0枚と最も早かったが、12月中旬～1月中旬は0.3～0.5枚と最も遅く、地温の経過とよく一致した。
- (5) 葉重は11月にピークに達し、また、果実重は1月上旬が最も多く、2月下旬には減少し、4月に再び増加した。一方、根重は早出し夜冷及び普通夜冷では11月上旬、ポット育苗では11月下旬にピークとなり、12月以降は減少し、健全根数もほぼ同様の傾向を示した。
- (6) 時期別収穫果重は、早出し夜冷で12月下旬、普通夜冷及びポット育苗で1月中旬にやや少なくなり、3月上旬は各作型ともとくに少なく中休み現象が認められた。
- (7) 以上の結果から、定植後の生育は地温の影響が大きいことが明らかとなり、とくに地温の低下する1月は出葉速度が遅く、健全根数及び根重が減少し、地下部の生育も抑制された。また、着果量は1月上旬が最も多いことから、3月上旬の収量低下は地温の低下による生育の停滞に加え、着果負担の増加により助長されたものと考えられた。

## 4. 成果の要約

生育診断技術確立のための基礎資料を得るため、作型別の生育パターンを調査した。定植後の生育は、地温の低下とともに出葉速度が遅くなり、地下部の生育も抑制された。また、着果量は1月上旬が最も多く、これらが3月上旬の中休み現象の原因と考えられた。

(担当者 栃木分場 栃木博美)

表-1 出蕾、開花及び収穫始期

作型	出蕾期		開花始期		収穫始期			着花数 花/株	
	頂	1次腋	頂	1次腋	頂	1次腋	2次腋	頂	1次腋
早出し夜冷	10. 2	11. 5	10.16	11.18	11. 9	12.24	3.14	26.6	32.9
普通夜冷	10.10	11.14	10.24	11.26	11.29	1.12	3.14	25.4	28.6
ポット育苗	10.14	11.18	10.28	12. 2	12. 6	1.17	3.16	29.6	26.5

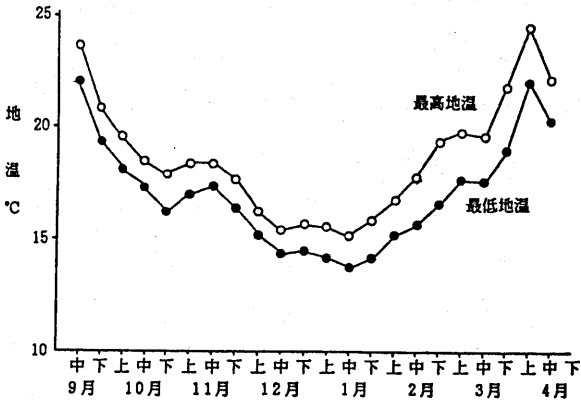


図-1 地温経過

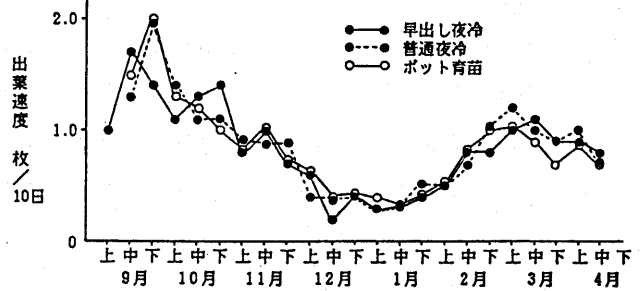


図-2 作型別出葉速度

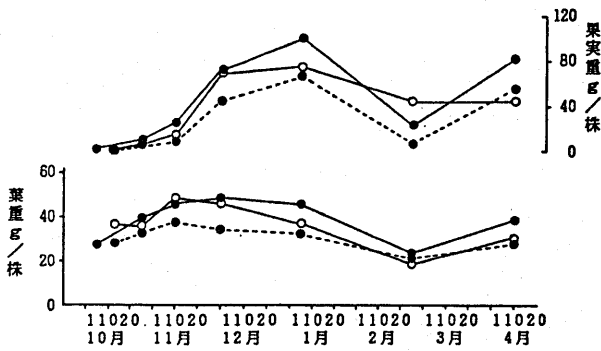


図-3 作型別生体重(地上部)

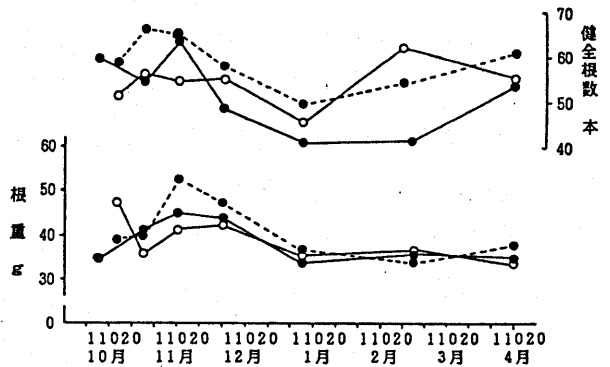


図-4 作型別生体重(地下部)及び健全根数

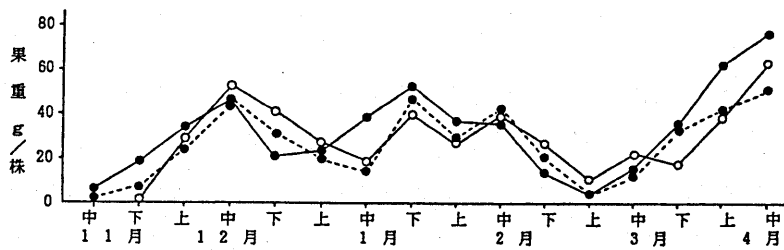


図-5 作型別収穫果重